慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	P. Bourdieuの研究実践と認識論の基層的形成 : 1951-64年における問題関心と学問形成の関連をめぐって
Sub Title	The original formation of Bourdieu's sociological practice and epistemology : a review of his early experience, interests and work from 1951-64
Author	三浦, 直子(Miura, Naoko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1996
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.44 (1996.) ,p.21- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000044-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

P. Bourdieu の研究実践と認識論の基層的形成

——1951-64 年における問題関心と学問形成の関連をめぐって——

The Original Formation of Bourdieu's Sociological Practice and Epistemology

——a review of his early experience, interests and work from 1951-64——

三　浦　直　子*

Naoko Miura

Pierre Bourdieu (1930—), a French sociologist, has made contributions in the fields of anthropology, sociology and philosophy. He refers to social change in Algeria and, on the other hand, to education, art, literature, culture, hobby, social class, language, knowledge, science itself and so on. But this broader view has made his work complex and, therefore, only a small part of his complete work has been discussed. Those discussions, however, restrain the potential of Bourdieu's sociological theory.

Bourdieu regards his theory as method, and this approach is what characterizes his work. The roots of his theory as method, that is, the theory of 'reflexive sociology' based on epistemology, lie not only in his sociological research but also in his early experience, interests and previous work. This suggests that the original formation of Bourdieu's sociological practice and epistemology has established by his experience, interests, and work on philosophy and anthropology from 1951-64.

1. はじめに

ピエール・ブルデュー (Pierre Bourdieu: 1930—) はフランスの社会学者であり，民族学・文化人類学，社会学，哲学において多くの業績を残している。その研究領域は，社会変動期にあるアルジェリアから，フランス社会の教育・芸術・文学・文化＝教養・趣味・階級，さらに言語・知識・認識・科学そのものへの検討と，非常に多岐に渡る。しかし対象の広域さ・複雑さゆえに彼の業績の一部のみが取り上げられ論じられることが多く，彼の研究実践それ自体に対する包括的な議論はほとんどなされてこなかった[1]。だがこうした捉え方では，ブルデュー社会学の可能性を制限してしまいかねない。ところでブルデューは自身の理論を「理論ではなく手法である」と位置づけている [Harker et al. 1990, 33＝93, 45] (2)。思うにこの定義こそ，自らの研究実践をも研究対象とする，認識論を内包した独自の社会学理論（プラティック理論）の性格を最も的確に表現しているといえよう。そして認識論を内包する〈手法としての理論〉という視点，すなわち認識論的反省に基づいた「反省的社会学 (sociologie réflexive)」の視点[2]は，既に研究当初から絶えず意識されていたものであった。ブルデュー社会学の最大の強みは，まさにこの認識論的反省の重要性と実践性を見失わなかった点に求められるのではないか。このような理解を踏まえ，本稿では彼の研究の端緒，つまり社会学的研究以前の哲学的・民族学的研究を時系列的に概観することにより，その研究実践と認識論への関心のルーツを辿りたい（2・3 節)。そうした考察の過程で，認識論的反省の萌芽といえる初期社会学（「全的人間学 (anthropologie totale)」）における〈調整的な視点〉も明らかとなろう（4 節)。

考察を進めるにあたっては文献調査が中心となるが，さしあたりまずここで資料とする文献について触れておこう。ブルデューの研究軌跡を一瞥すると，表【Pierre Bourdieu の略歴及び主要著作一覧】に示されるように，

* 社会学研究科社会学専攻博士課程（理論社会学・家族社会学）

【表：Pierre Bourdieu の略歴及び主要著作一覧**】

学生時代	◇1930 年 8 月 1 日，南フランスのピレネー・アトランティック県ダンガン村の郵便配達夫の家に生まれる ◇1951 年パリのエコール・ノルマル（高等師範学校）に入学（数学・科学史・科学哲学を専攻） ◇1953 年アグレガシオン（教職資格）取得 ◆ライプニッツ「デカルト『哲学原理』についてのノート」の注解及び翻訳（1953 年ディプローム論文） ・個々のテクストをコンテクストの中に置き直すという作業 ◇1954 年エコール 4 年次に進級せず，アリエ県ムーランの高等学校の哲学教師の職に就く
初期アルジェリア研究期	◇1956 年一兵卒としてアルジェリアに 2 年間配置される（アルジェリア戦争に兵役） ◇1958 年アルジェ大学の助手に就任 ◇現地の学生と共に精力的にフィールド・ワークを行う ◆『アルジェリアの社会学』1958 年（1962 年に改訂） ・哲学者という自覚（哲学的課題を現実社会の中で分析）→認識論・方法論への言及 ◇1960 年帰国，ソルボンヌ大学の助手に就任(6-9 月にアルジェリアでフィールド・ワーク及び統計調査を実施) ◇1961 年リール大学の助教授に就任→教育と文化の調査開始 ◆「独身と農民状況」1962 年 ・「主観」と「客観」の和解という研究課題の設定 ◆「家または転倒した世界」1963 年 ・構造主義者としての最後の論文 ・「身体」への着目 ◆「伝統社会～時間に関する態度と経済的行動～」1963 年 ・失業意識と時間概念との構造的相同性への注目 ◆『アルジェリアの労働と労働者』1963 年 (& A. Dardel, J. P. Rivet, C. Seibel) ・「個人的予測と客観的機会」という視点の設定 ◇1964 年社会科学高等研究院の教授・研究主任に就任 ◆『デラシヌマン（離郷・根絶）～アルジェリアの伝統的農業の危機～』1964 年 (& A. Sayad) ・ハビトゥス概念の登場
全的人間学研究期（社会学的研究への移行）	◆『遺産相続者たち～学生と文化～』1964 年 (& J. C. Passeron) ・教育社会学的研究（社会階級と高等教育の分析） ・民族学・文化人類学的研究蓄積の社会学への適用 ◆『中間芸術～写真の社会的使用に関するエッセー～』1965 年 (& L. Boltanski, R. Castel, J. C. Chamboredon: 邦訳『写真論』1990) ・全的人間学の構想 ・文化社会学的研究（社会階級と文化の分析） ・「文化の正統性」概念の考察 ◆『教育的関係とコミュニケーション』1965 年 (& J. C. Passeron, M. S. Martin) ◆『芸術愛好～西洋芸術の美術館とその鑑賞者～』1966 年(& A. Darbel, D. Schnapper; 邦訳『美術愛好』1994) ◆「知の場と創造的投企」1966 年 ・「場 (champ)」の概念の考察 ◆「1945 年以降のフランスの社会学と哲学～主体なき哲学の死と再生～」1967 年 (& J. C. Passeron) ・哲学の「場」の社会学的分析 ◆「教育システムと思考のシステム」1968 年 ・認識様式の教育社会学的分析 ◆「ゴジック建築とスコラ的思考」1967 年（パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』の仏訳及び後書き） ・パノフスキーの影響→ハビトゥス概念の展開 ◇1968 年教育文化社会学センター（後のヨーロッパ社会学センター）を主宰 ◆「構造主義と社会学的知識の理論」1968 年 ◆『社会学者のメチエ』1968 年（& J. C. Chamboredon, J. C. Passeron: 邦訳『社会学者のメチエ』1994） ・教育文化社会学センターでのテキスト用に編纂 ・科学認識論による社会学の研究実践（認識論・方法論）の位置づけ ◆『象徴的諸形態の社会学に向けて』1970 年 ・象徴的権力論の構想 ◆『再生産～教育システムの理論のための基本原理～』1970 年（& J. C. Passeron：邦訳『再生産』1991） ・教育―文化―社会階級をめぐる社会学理論の構築

** この年表は，[Bourdieu 1987＝91] [Harker et al. 1990＝93] [日本エディタースクール 1986][小澤 1994] 等を参照し，筆者自身が作成したものである。略歴を◇で，ブルデューの仏・英・独語で発表された主要著作を◆で記している。ただし，同一年内の著作は順不同である。

【表：続き】

プラティック理論確立期	◆『機会平等の幻想』1971 年 (& J. C. Passeron) ◆「マックス・ウェーバーによる宗教理論の解釈」「宗教的場の生産と構造」1971 年 ・「場」の理論の展開→文化＝信仰＝象徴的社会学のための理論枠組みの考察 ◆「植民地アルジェリアにおける失業意識の諸形態と諸段階」1971 年 ・アルジェリア研究に再び乗り出す ◆「再生産システムにおける婚姻戦略」1972 年 ・ブルデューの生まれ故郷ベアルン地方の婚姻形態の分析 ・現代フランスの民族学的研究 ◆『プラティック理論の素描～カビール民族学の 3 つの研究に寄せて～』1972 年 (1977 年に英訳＝加筆『プラティック理論の概要』) ・アルジェリア研究の再検討 ・「戦略」概念の考察 ◆「再転換戦略～社会階級と教育システム～」1973 年 ・民族学的研究の成果を社会学へ適用 ◆『象徴的権力論の基礎』1973 年 (& J. C. Passeron) ◇1975 年より雑誌『アクト（Actes de la recherche en sciences sociales，社会科学研究報)』の出版・編集 ◆「科学的方法と対象の社会的ヒエラルキー」「科学的場の特性と理性の進展の社会的状態」1975 年 ◆「実践感覚」1976 年 ・「実践感覚」概念の登場 ◆『アルジェリア 60』1977 年（邦訳『資本主義のハビトゥス』1993） ・1960 年代のアルジェリア研究の総括（テキスト用） ・経済人類学的分析 ◆『ディスタンクシオン(卓越化)～判断力の社会的批判～』1979 年(邦訳『ディスタンクシオン』1989→1990) ・現代フランス社会の諸階級の民族学的分析 ・文化の生産—消費に関する「場」の分析 ◆『実践感覚』1980 年（邦訳『実践感覚』1988･91） ・プラティック理論の確立 ・アルジェリア研究の理論的総括 ・行為者＝研究者の認識様式の分析
プラティック理論展開期	◇1981 年にコレージュ・ド・フランスの教授に就任 ◆『講義に関する講義』1982 年 ・教授就任演説→ブルデュー自身の学問的「場」における位置の分析 ◆『話すということの意味～言語的交換のエコノミー～』1982 年（邦訳『話すということ』1993） ・構造主義言語学を批判 ◆『ホモ・アカデミクス』1984 年 ・ブルデュー自身の位置する，現代フランスの学問的「場」の分析 ◆『国家貴族～グランゼコールと身体能力～』1989 年 ・教育社会学的研究の総括 ◆『言語と象徴的権力』1991 年 (& T. B. Thompson 共編) ◆『変動する社会のための社会理論』1991 年（& J. S. Coleman 共編） ◆『応答』1992 年 (& J. D. Wacpuant) ◆『芸術の規則』1992 年（邦訳『芸術の規則』1995） ◇1993 年 CNRS（フランス科学研究庁）の金メダル賞を受賞 ◆『世界の悲惨』1993 年 ・「社会—分析」の展開 ◆『自由交換』1994 年 (& H. Haacke：邦訳『自由交換』1996) ◆『実践理性～行為の理論に向けて～』1994 年

50 年代後半からアルジェリアの民族学的研究を行った後，1964 年には社会学的研究（「全的人間学」の研究）に移行し，さらに 70 年代に入って再び民族学的研究を検討，1980 年『実践感覚』において「プラティック理論」を確立していることが分かる。本稿では，専らブルデューの研究実践と認識論の基層的形成を解明することを目指して，これまでほとんど言及されてこなかった学生時代の学問的背景及び社会学的研究以前（1964 年ま

で）の民族学的・文化人類学的研究（初期アルジェリア研究）について吟味する。ただし後者に関しては70年代の民族学的研究とは厳密に区別して論じる必要があろう[3]。そこでまず扱う資料を，(1) 1958-64年の著作，(2) 1964年以前についての回顧的記述やインタビューを掲載した著作，(3) 1964年以降の社会学の著作，(4) 他の研究者による1964年以前のブルデュー理論についての分析，の4種類に大別した。以下，本文中の参考・引用文献の末尾には，文献の性質を明らかにするため，分類番号（上述の(1)〜(4)）を記しておく。

また本稿の性格上，ブルデューの学問的背景となった経験や問題関心（特に反省的視点）と彼の研究軌跡との関連に限定して論を展開することを予め断っておきたい。従って個々の著作の具体的内容には直接言及せず，対象とする資料の範囲も社会学的研究への移行に至る過程（1951-64年）までのものに限られる。換言すれば，本稿で扱われるのは，ブルデューの理論形成の全体像ではないことを，改めて強調しておく[4]。

2. 学生時代の哲学的研究

ブルデューは，1930年8月1日，スペインとの国境に近いフランス南西部のベアルン地方の小さな村に，郵便配達夫の息子として生まれた。田舎の閉鎖的な地域で幼年時代を過ごした彼は，1951年エコール・ノルマル（高等師範学校）に入学するためにパリに上京する。初めてパリの文化を目の当たりにした時の当惑はどれほどのものであったろう。「都会の文明に出くわした田舎の少年」[Harker et al. 1990, 26＝93, 34] (4) は，パリの「正統文化」に近づこうと努力し，自身の出自に対して文化的恥辱感を抱えていた [NHK 1994] (2)。

エコール・ノルマルで哲学を専攻した当時は，サルトルに代表される実存主義を経由した現象学が一世を風靡していた。しかしブルデューは，現象学の登場を評価しつつも，知的流行に乗るような形で実存主義的なムードに飲み込まれることはなかった [1987, 15＝91, 13] (2)。というのも彼は入学以前に既にサルトルの著作を読んでおり，しかも在学中にもメルロ＝ポンティ，フッサール（『経験と判断』『イデーン II』），ハイデガー（『存在と時間』）など，仏訳のない現象学の多くの文献に意欲的に取り組んでいたからである [Harker et al. 1990, 37＝93, 51] (4)。なお，この時期に接したフッサールの時間・歴史に関する分析には，後に社会学的研究を始める際に（シュッツの理論とともに）多大な示唆を得ている。また，自然科学や人間科学に隣接して研究を続けたメルロ＝ポンティの営為は，実存主義の「解毒剤」として非常に役立った [加藤 1990, 13] (2)。のみならず現象学は，アルジェリアにおける最初の民族学的研究を「感情生活の現象学」として位置づける試みへと，さらに展開されていったと推測される。

他方ブルデューは，将来社会学に従事するという意図を全く持たないまま，知的関心に応じて数多くの社会学の文献に触れている。なかでもマルクスは，繰り返し著作に引用されていることからも明らかなように，哲学的・思想的に強く影響を及ぼした。学生時代には，政治的意図からではなく純粋に学問的関心から，主として青年期のマルクスの著作を読んでいるが [1987, 13・27-8＝91, 10・32-3] (2)，とりわけ『ドイツ・イデオロギー』の「フォイエルバッハ・テーゼ」に感銘を受けたようである。それがブルデューにとって重要であったのは，彼自身の要約を引用すれば，「唯物論の不幸は，認識というものがそもそも一つの生産，一つの集合的労働といったものであるのに，対象はわれわれの構成の所産であるという考え方を観念論に預けたまま，唯物論を世界の反映としての認識理論と同一視してしまったことである。」と気付かせてくれたからであった [1980b, 92＝91, 116] (2)。マルクスの説くところ，観念論の立場が感性・認識もひとつの社会的産物であるという側面を無視している一方で，唯物論は感性・認識の実践的な「現実の構成」としての側面を理解しない。そのためどちらの立場も研究者の無反省的な「直観」を前提としてしまい，十分には人間の実践を把握できない。ゆえに新たに人間の実践を，社会的諸関係の総和（アンサンブル）として関係性の中に位置づけ把握する研究視点が提唱されなければならない。こうしたマルクスの関係主義には，構造主義の認識様式である「関係的思考様式」との親和性がうかがわれ[5]，後にブルデューが構造主義を受容する基盤となったと思われる。とはいえ，マルクス哲学に影響を受けその思想に理解を示しながらも，彼は「マルクス主義」の立場とは厳しく距離をとっていた[6]。同時にブルデューは，当時フランスではまだ翻訳もされず，特にマルクス主義者によって右翼の社会学者と見なされタブー視されていたウェーバーを，独語の原典に当たりながら読み進めていた。その中国に関する比較歴史学的研究や教育システムの比較研究の仕事に示されるいきいきとした分析は魅力的に映ったことであろう [加藤 1990, 32] (2)。このようにブルデューは，はからずも比較的早い時期から社会学の古典に馴染んでいたのである。

ところが上述したようなブルデューの知的関心の広範

さ・リベラルな姿勢とは裏腹に，大学で教えられる知識の多くは，保守的・権威的なものであった。加えてそうした知識の教授に際しては，古典を読解し，試験を受け，論文を書くといういわゆる「学校的」な手続きに従わせる重圧的姿勢が顕著であった[7]。そこでブルデューは，教条的な講読，すなわち古典を読むだけという「学校的」な読書に飽き足らず，哲学に積極的な意味を与えようと試み始める [1987, 13＝91, 11] (2)。ことに彼は，哲学の個々の内容よりも，哲学の成立条件や認識の変化に興味を持ち，科学史・哲学史や認識論の歴史，すなわち哲学体系そのものの変化と歩みを研究するべく，数学とともに科学史・科学哲学を専攻研究にあてた。その際幸運であったのは，指導教授として選んだカンギレムがかつてバシュラールに師事していたため，科学認識論に接する機会に恵まれたことであろう。こうして通常は社会学者から無視されがちな科学哲学者たち――バシュラール，デュエム，キャンベル等――へと関心が向けられてゆく。

思うにこの科学認識論に対する関心こそ，社会学の研究実践における認識論的基盤への要求を生み出す原動力となったに違いない。また他方でこの関心は，後の研究を方向づける「新しい視点と新しいやり方」に，すなわち認識論を内包する社会学理論の考察に取り組む契機を与えたと思われる [Harker et al. 1990, 37＝93, 51] (4)。言い換えれば，ブルデューの社会学理論が極めて卓越した性格を帯びているのは，ひとえにこうした科学哲学・科学認識論に関する十分な理解に負っているといえよう[8]。引き続いて2年次には，グーエイのもとでライプニッツの「デカルト『哲学原理』についてのノート」の注解付き翻訳が行われ，ディプローム論文（エコール2年目に書く論文）にまとめられている [1987, 13＝91, 11] (2)。ブルデューは，デカルトについての断片的で不完全なライプニッツのテキストを理解するために，個々のテクストをコンテクストの中，すなわち全テクストの関係性の中に置き解釈し直した。まさにこの作業は，体系的・関係的に対象を構成する「関係的思考様式」の実践と考えることができる。その営みがいかに意義深い経験であったかは，「こうした作業と，哲学史の勉強はとにかく有益でした」[加藤 1990, 14] (2) という彼自身の回想からもうかがわれよう。

3. 民族学・文化人類学的研究[9]

3-1 アルジェリアにおける研究

エコール・ノルマル卒業後の進路について，当初ブルデューは，哲学研究をさらに続け，現象学と生物学との融合としての「感情生活の現象学」つまり「感情的な経験の時間的構造に関する研究」を企図していた [1987, 16＝91, 15](2)。そのために医学を学ぶ必要性を感じ，高等学校の哲学教師のポストに就きつつ学業に専心する予定であった。しかし実際にはムーランの高校で1年間教鞭を取るとすぐ，植民地アルジェリアにおける独立戦争のために兵役を志願する [加藤 1990, 14] (2)。この戦争の間に，彼は次第にアルジェリア文化に関心を持ち始め，自分が研究したい特定の集団をあちこち探し歩いた。前述した科学認識論の受容と並んで，この時得た「幸福な経験」，戦時下を逞しく生きるアルジェリアの人々との親密な交流もまた [Harker et al. 1990, 40-1＝93, 56-7] (2)，以降の研究を決定的に方向付ける要素となったことは疑いえない。なぜなら人々との接触を通じて，故郷ベアルン地方の農民との共通点・親和性が見出されたためである。アルジェリア住民に共感のこもった眼差しを向けることができたのは，こうしたブルデューの個人的背景に負っているが，それは同時に彼自身の出自に対する文化的恥辱感からの「解放」をも意味していた [NHK 1994] (2)。それゆえ「第二の故郷」とさえ感じられるほどに，ブルデューにとってアルジェリア滞在は重要な経験となったのである。

2年間の兵役の後，ブルデューはそのまま留まり研究を進めようと決心し，アルジェ大学の助手のポストに就く。大学ではソシュールについて講義したのであるが，このソシュールの読解を通じて，流行的ではない構造主義の可能性について，また純粋な「理論」の持つ限界について，考察を深めていったと推察される [1987, 16＝91, 15] (2)。

この地でブルデューは，アルジェリアの人々の苦境を，そしてまたアルジェリアに住む（植民地支配者としての）フランス人の劇的な状況を照らし出そうとする意図で著述を開始している。こうした意図は，フランス在住の知識人たちが前提とするアルジェリア像と，実際に現地に赴いた自身の経験とのギャップがあまりに大きかった点からもたらされたものであった。彼は戦争の「たんなる傍観者であることの罪悪感を克服するために」，科学者としてアルジェリアの解放に貢献しようとしたのである [Harker et al. 1990, 39＝93, 54] (2)。こうした強い政治的意識に触発されつつ，1958年にフランスで『アルジェリアの社会学』がクセジュ文庫から出版された。この著作は「社会学」という表題を掲げつつも，哲学的課題と民族学的調査に基づいており，彼の「社会

学」への関わり方を象徴的に表す複雑な構成になっている。それはおそらくこの書が，上述の政治的意識を表現するばかりでなく，フランスの読者にアルジェリアの真の姿とその革命の根拠を学問的に伝えるという作業を通じて，ブルデューの兵士としての体験・アルジェリアに住むフランス人としての経験に対して自ずと対象化・反省を促す威力を秘めていたためであろう。

最初の著作『アルジェリアの社会学』は，エコール・ノルマル卒業以来の哲学的課題を継承しているといえよう。この時期ブルデューは，自分自身をまだ哲学者と見なしていた [1987, 16＝91, 15] (2)。しかし彼の哲学的動機，すなわち哲学が本質的な原因を説明をしないですませてきたテーマを現実の中に探求しようとする姿勢が，逆説的にではあるが彼の著作に「社会学」という表題を与えたと思われる [Robbins 1991, 15] (4)。このような哲学的動機は，社会学研究における認識論・方法論の検討と不可分のものでもあった。そしてこうした検討を通じて，第三者の暗黙の課題設定に拘束された二次資料を用いた間接的な考察ではなく，観察（民族学的調査）と測定（統計学的調査）に基づいて事実を探求するという，ブルデューの基本的な研究姿勢が形成されていったのであろう [1987, 17＝91, 16-7] (2)。従ってアルジェリアでの研究こそ，哲学から社会科学へと至るブルデューの研究軌跡の転換点と規定すべきである。

他のマグレブ地域と比べて「本当の文化的単位を構成していない」という当時のアルジェリアの状態が，こうした調査から明るみにされた [1958, 5＝62, xi] (1)。そこはまさに変動期の社会であり，土着の文化と西洋文化との間に生じた衝突が，重圧を伴って人々の生活に押し寄せてきていた。このアルジェリア独立闘争の真の姿，すなわち植民地化と西洋文化流入による伝統社会の崩壊の過程を理解することが，政治的意識に裏づけられた当初の研究目標であったといえる [1980a, 7-9＝88, 2-3] (2)。

けれども他方で民族学的な事例研究は，いかにして社会を記述するかという，方法論をめぐる根本的問いを生み出すことになった。その問いに答えるにあたってブルデューはまず，「アルジェリア」は現実の客観的単位ではないと強調する [1958, 5＝62, xi] (1)。研究者視点によって構成された概念は，いかに自明と見なされていても，それを実体化して論じてはならない。その危険性は，民族学的研究に取り組み始めたかなり初期の段階から自覚されていたのである。注目すべきことに，ブルデューは認識論・方法論を検討する際，マルクスの全著作を読み返している [1987, 17＝91, 16] (2)。とすれば上述した実体化の危険性に関する彼の自覚も，関係主義の延長線上に位置づけられるといえるのではないか。関係主義の立場は，直観的唯物論を慎重に避けつつ，観念論が無視した社会的諸条件をも考慮に入れることを要請する。同様にブルデューも，概念を実体化することを厳しく戒める。また研究者が現実を「構成」するという自覚は，仏植民地アルジェリアにおいて状況を「記述」することや調査結果を提示することすら，一つの「政治的行為」にほかならず，それは植民地化された人々（被調査者であるアルジェリア人）と植民地化した人々（ブルデューらフランス人）との関係・文脈において重要性を持っているという自省をも促したのではないだろうか。だからこそブルデューは，革命への共感を抱きつつも，ヒューマニスティックな楽観を禁じて，ひたすら理論に基づいた客観的な分析に専念していったのであろう。なぜなら理論に基づく客観的分析のみが，人々の反応を誘発し，もって社会学を現実に貢献させ得る唯一の方法である，と考えたからであった。

『アルジェリアの社会学』においては，アルジェリア北部の山岳地帯に位置するカビール社会がいわば身体的地政学の観点から分析されており，その際デュルケム（直接的にはモース），マルクス，ウェーバーらの社会学理論の妥当性の検証も試みられている。まずはじめにカビール社会に見られる密接な協力関係・社会秩序の誇張された完璧さが，自然環境への無力さ・不安定さ（技術力のなさ）を社会組織の優越性によって（つまり協力関係を発達させる以外に頼る手段を持たないために）補い対抗的にバランスを保つ機能として叙述される [1958＝62, 25] (1)。ここでブルデューは，「制度の『本来的機能』は行為者に隠されたままである一方で，彼らは『二次的機能』の枠組み内で意識的に行為し続ける」というモースの主張を参考に，本来的な「対抗的にバランスを保つ機能」が，社会に埋め込まれている当の人々には意識されていないことを強調する [1958, ＝62, 24] (1)。ついで婚姻持参金システムの分析においても，経済的機能に二次的地位を与えて互酬的交換による社会的安定の機能を指摘し，「社会的行為の全側面は，社会的調和を維持するために相互に補強し合っている」という視点から，素朴なマルクス主義的解釈・経済決定論を批判している [Robbins 1991, 19·21] (4)。さらに彼はウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を批判的に継承しつつ，アルジェリアに住むイスラム聖者にとっても宗教的原理そのものは二次的な機能しか有さず，むし

ろ「設定された」原理を「生きられた」体験へと変換して社会的調和を維持しているという効果に，その本来的機能を見出した［1958＝62, 45］(1)。諸学派の対立にとらわれず謙虚かつ真摯に社会学理論を比較考慮していくというブルデュー社会学の特徴が，既にこの時期の考察からもうかがい知ることができよう。

3-2　帰国後の研究

1960年，アルジェリアの状況が緊迫してきたという事情から，ブルデューの身を案じたアロンはソルボンヌ大学の助手として彼をフランスに呼び戻す［加藤 1990, 20］[10]。ブルデューはアロンに頼まれて大学でデュルケムについて講義しているが，この講義準備に迫られて彼は「社会的事実」として対象を扱う視点など，初めて深くデュルケムを理解するようになってゆく［加藤 1990, 25-6］(2)。またこの時期ミューゼ・ド・ロムの民族学の講義を聴講し，やがてコレージュ・ド・フランスのレヴィ＝ストロースのセミナーに参加することを通じて，彼と直接交流を持つようにもなった［Harker et al. 1990, 41-2＝93, 57-8］(2)。これはアルジェリアの民族学的研究についての助言を求めたのがきっかけであった。ブルデューは，デュルケム主義を目覚めさせ再創造した人物としてレヴィ＝ストロースを高く評価する［加藤 1990, 27-8］(2)。こうして彼は，構造主義に触発された民族学的・文化人類学的研究を試みるようになった。

ところで帰国後に行ったブルデューの民族学的研究には，『アルジェリアの社会学』に比べていくつかの変化が見られる。具体的に言えば，植民地化された人々と植民地化した人々に関するものから，独立したアルジェリアの内部状態・革命的変化の過程に関するものへと，自分の位置を漸次調節していったのである。それは，アルジェリア社会という分析の対象のみならず，何より分析的・提示的行為それ自体の性質も等しく「過渡期に晒されている」という点に気づいたからであろう。ともあれこの発見は，フランスの読者に対する政治的意識から離れて，自分自身を客観的な観察者として，アルジェリアの社会的自己確立に貢献する変化の過程の中にいる主体として見ることを可能にしたのであった［Robbins 1991, 21-2］(4)。

さて研究態度をこのように設定し直す中で書かれた『アルジェリアの労働と労働者』及び『デラシヌマン』は，もとより1960年に3カ月間行われた現地調査に基づいている。当時アルジェリアの労働者は，フランス軍が強引に彼らを都市に集中させたために，「根こそぎ（デラシヌマン /déracinement)」にされて伝統社会の価値観から切り放されてしまっていた。加えて貨幣経済の合理性至上主義に突然直面させられたことにより狼狽と混乱が生じ，その結果社会は一種のアノミー的状況に支配されていたのである［加藤 1990,195］(2)。

『アルジェリアの労働と労働者』は，2部に分かれており，前半部における統計的調査により描き出されたアルジェリア像を踏まえて，後半部を担当したブルデューの分析ではインタビューや写真資料を駆使して[11]，なお部分的には田舎の伝統社会の価値観・行動様式を維持する都市労働者が直面した諸問題に焦点が当てられている［1963］(1)。また『デラシヌマン』では，『アルジェリアの労働と労働者』と相補的に，田舎に残った人々（農民）の農業労働に対する矛盾した態度について，より社会学的な分析がなされている［1964a］(1)。特に興味深いのは，両著作で共通して取り上げられている失業に関する考察であろう。それによると，失業の事実と失業意識とは相互に設立的であり，互いに補強的に働く。このことは次の例によって明らかになる。すなわち，人々の雇用形態を知るために古典的な統計的調査に則り質問を行った際，同じように一ケ月の間一日も働かなかった者の中でも，ある者は自分を「農民（労働者）だ」と規定し，またある者は反対に自分を「失業者だ」と捉えるというように，答えがまちまちにわかれてしまったのである［加藤 1990, 195-6］(2)。近代的経済に馴染んだ人々つまりブルデュー自身を含む資本主義国家の人々にとっては自明な「労働」という定義が，実は非常に恣意的なものでしかないということが，はからずもこの調査によって暴露された。これ以降ブルデューは自明性への考察，換言すれば「反省」を特に重視するようになる。ここからさらにブルデューは，失業意識と時間感覚との構造的相同性に注目し，時間に対する態度を経済的地位を反映する鍵と見なす。すると「失業中」という状況は部分的には「態度」の問題として解析され，また個人の「客観的」未来における生活機会も，当人の現在の「客観的」物質的状況によってではなく，むしろ所属する集団の「客観的未来」についての知覚（集団的意識）を仲介として決定されることが明らかにされる［Robbins 1991, 24-5］(4)。このような考察を通じて，『アルジェリアの労働と労働者』において初めて「個人的期待と客観的機会」［1963, 338］(1) という概念枠組みが提起されるに至ったのだが，ブルデューはこの両者を和解させ「全体性」を構築する義務が研究者にはあるという視点を設定するようになる［小澤 1994, 135・148］(4)。この視点はやがて，社会学的研究に着手した際の「全的人間学」の構想へ受

け継がれると考えられよう。

民族学的・文化人類学的研究を進めていく中で，レヴィ＝ストロースから大きな影響を受けていたのは前述した通りである。当時ブルデューは，何より構造主義の視点＝関係的思考様式を，社会学の中に適用しようと努めていた[1987, 16＝91, 15](2)。しかし同時にレヴィ＝ストロースとの不一致点も，早くから自覚していたらしい。レヴィ＝ストロースは，婚姻を規則や無意識的なモデル（例えば交叉イトコ婚）に従うものとして位置づける。けれどもブルデューは，実際にはそうでないこと，すなわち規則やモデルは多くの例外によって規制性を乱されていることに気づいていた［加藤 1990, 28］(2)[12]。例えば 1962 年にブルデューは，レヴィ＝ストロースの助言に従ってそれまでアルジェリアで収集した資料をパンチ・カード 1500 枚に登録し，それを相互に関連づけながら体系的に整理しようと試みている[1980a, 2＝88, 14](2)。だがこうした作業を通じて書かれた「家または転倒した世界」[1980a, 441-61＝90, 221-31](1) は，逆に構造主義の限界を明らかにするものとなった。ブルデュー自身もそれを「良き構造主義者としての最後の論文」[1980a, 22＝88, 16](2) と評している。この論文では，カビールの家の構造が分割原理に則って呈示される一方で，男女の視点や対立する身体運動（家への出入り）の視点によって，どのように空間（方向とその意味づけ）の把握が異なるかについて描写されている。そしてここで得られた知見を通じて彼は，行為の規則性を説明するためには，「無意識的でありながら同時に系統的な仕方で諸々の実践を方向づけうる秩序づけ原理を身体化された傾向の側に，さらには身体図式の側に」見出す必要を感じ始めたのである[1980a, 22＝88, 16](2)。構造主義の特色たる「法則万能主義」に対するこのような懐疑は，とりわけ以降の社会学的研究において，実践の生成原理としてのハビトゥスに着眼する契機になったといえよう［小澤 1994］(4)[13]。

もう一つ，ブルデューが疑念を向けた対象として，構造主義が暗黙に前提としていた「観察者の認識論的特権」が挙げられよう。この絶対的な「観察者」という視点への懐疑は，彼自身が行った調査の体験に由来する。ブルデューはアルジェリア人学生と共に現地調査を行ったのであるが，そのとき上層階級出身のアルジェリア人学生は現地人を汚がり恐がる一方で，神秘主義的な言辞を述べて民衆を賛美してもいた［加藤 1990, 21-2］(2)。反対にブルデュー自身にとっては，アルジェリアの婚姻や儀礼を見下す視点を取ることが困難だった。それは既に彼が，名誉や恥などについて全く同様な言説を行う故郷ベアルン地方の農民たちを知っていたという事実に起因しているのかもしれない。いずれにせよ当該の調査におけるブルデューの立場，すなわち研究者であると同時に同じ社会的世界を生きる行為者でもあるというまさにこの体験が，構造主義が暗黙に前提とする主知主義的態度に対しての批判へと昇華された事実は否定できないだろう[1987, 32-3＝91, 39](2)。さらに法則万能主義への批判に加えて，ウェーバーの「社会的行為者は規則に従う利益の方が従わない利益に勝るときに，規則に従う」という「健全にして良き唯物論的文章」[1987, 94＝91, 123](2) からアイディアを得た彼は，むしろ規則が効力を発揮しうる条件への考察へと向かっていくようになったと考えられる。調査における研究者自身の関与についての批判的眼差しは，異文化を素材とする民族学的研究から，自身が生きる現代フランス社会に対する社会学的研究へと，必然的に受け継がれてゆくのである。

4. 初期社会学における〈調整的な視点〉

4-1 社会学的研究への移行

ブルデューが社会学的研究へと傾斜した背景には，民族学的研究との断絶と継承という二つの側面があることを見落としてはならない。確かに対象とする社会は，異文化の地であるアルジェリアから，自らの属するフランスへと，全く異なっている。しかし両者に臨む姿勢が一貫していたがゆえに，矛盾なく移行しえたのである。この共通する研究姿勢こそ，ブルデュー社会学の特徴といっても過言ではない。そこで特に民族学的研究の継承に焦点を当て，その移行過程を見ておきたい。

アルジェリアで思いがけず故郷との類似を見出したことが，「認識論的な体験」としてブルデューの胸に刻まれ，それが社会学研究への移行すなわち民族学的研究の成果を現代社会へ応用し一般化する出発点となったことは既に述べた。ここには，民族学的研究を通じて得られた，自己の立脚点を反省する視点が見て取れよう。ブルデューの研究実践の特色ともいえる自身へのこうした反省の視点は，様々な局面で垣間みられる。それは特に，異文化の中に定位しつつも表面上の相違を強調するのではなく，むしろ前節で指摘したように「現実の構成」という観察者の認識作用に注意を促し，調査状況における調査者（観察者）と被調査者との「関係性」に目を向ける姿勢に求められるのではないか。認識作用への注意は，主客対立といった理論上の立場の相克も実は研究者の認識が産出した虚構に過ぎないことを明らかにさせ

る。また調査を「政治的行為」と把握する思考は，なるほど戦時下にアルジェリアを調査するという特殊な経験から得られた認識論・方法論上の洞察ではあった。しかしそれにとどまらずこの自覚は，後にフランスにおける社会学的調査の場において生じる権力関係への問題提起という形でより一般化され，ブルデュー社会学の主要テーマのひとつとして据えられたのである。あわせて民族学・文化人類学における知的伝統・諸成果を，自らの生きる現代フランス社会内部の〈異文化〉理解へ適用する試みがなされたことも忘れてはならない[14]。

こうしてブルデューはフランス社会の分析へと移行する際，自己の立脚点でもある教育の場や学生時代に感じた文化的恥辱感を，民族学・文化人類学の手法を用いて理論化すべく，文化（＝教養 /culture）に関心を抱くようになったと思われる。もっとも当時の文化社会学は，未だ経済還元主義と観念・精神主義との二項対立にとらわれたままであった。対立図式に陥ることなく両者の止揚を図った彼は，〈そもそも文化そのものが，文化現象を特殊な利害と見なす利潤追求によって規定されている〉という仮説を提示する。さらにそこから，教育状況・研究実践も決して純粋に脱利害化された世界として展開するわけではないと気づくや否や，政治の領域として文化を捉えようと試みるようになる。その試行の中で得られたのが，〈社会の象徴生産はひとつの政治闘争である〉という命題にほかならない。ブルデューの社会学的研究はこのように，まず学校と教育の考察として始まり，次いで文化の場の中の社会関係の分析から文化制度そのものや言説の分析へと移り，やがて象徴や言説の生産をめぐる権力関係・社会階級の分析へと発展するという軌跡を辿っていると思われる[15]。

上述のような社会学的研究のための問いを立てる際には，アルジェリア研究と同様に哲学的課題が常に意識されていた。例えば，『中間芸術（邦訳：写真論）』(1965) は現実の社会的構成の問題に対する回答であり，また美術館に関する『美術愛好』(1966) では教養人の産出の社会的条件の問題が扱われ，とりわけ『ディスタンクシオン』(1969) ではカント的な判断力・趣味の判断力をめぐる問題から構想が練られている。ブルデューは，哲学的課題を現実社会の全体性の中で構成し直し，反証の基準に耐えうるような回答を与えることによって，自己の社会学的研究をいわば哲学の営みとして位置づけようとしてきたのであろう。従って彼が社会学を「他の手段で遂行された哲学，別のフィールドで別のやり方で遂行された哲学」「いわば哲学的意図の再定義」と解釈するのは，専らこのような意味においてのことなのである［加藤 1990, 43-4］(2)。

4-2 〈調整的な視点〉の特徴

社会学的研究を始めるにあたって，ブルデューは自己の営為を「全的人間学 (anthropologie totale)」として位置づけた。この命名からも分かるように，そこには哲学・民族学・社会学といった学問的棲み分けを超えて，トータルに人間を理解しようとする大きな目標が掲げられているといえよう。全的人間学については『中間芸術（邦訳：写真論）』の序章において仔細にわたって述べられているが，端的にいえばそれは〈調整的な視点〉を指す。（もっともブルデュー自身は「調整的な考え」と表現している [1965, 18＝90, 2] (3)。）

この〈調整的な視点〉には，詳しく検討してみると，以下の３つの次元があると想定される。まず第一に理論内部における調整が挙げられる。「主観的期待と客観的機会の和解」，すなわち社会学理論において主観主義と客観主義との対立を止揚するというブルデューの試みは，本稿において明らかにされたように，元来はアルジェリア研究における構造主義の乗り越えを意図して提起された概念枠組みであった。とはいえそこから要請される，構造と構造化過程とを共に分析するための全体的・包括的理解は，マルクスやウェーバーの影響を受けて，〈事象を産出する社会的諸条件への問いかけ〉という視点を自ずと生み出したのである[16]。

第二の次元は研究実践における調整である。これについては，測定データ（統計学的調査）とインタビュー資料（民族学的調査）との併置，また調査と理論との相互作用として，ブルデュー自身の研究において実際に用いられている。言い換えれば，この場合「調整」とは，研究実践に対して社会学理論に基づき不断に反省を重ねる視点であり，それは認識様式に関する理論を包含する「プラティック理論」の萌芽と見なせよう。

そして最後に，彼自身は明示していないが，学問形成と人間形成とを「調整」する次元が想定される。思うにブルデューの〈調整的な視点〉の最大の特徴は，その理論展開の過程において，自身の立脚点に反省を加える視点を常に持ち続けたということに求められるのではないだろうか。こうした立脚点への反省は，上述の研究実践における自らの理論的・実践的立場に対する反省と並んで，社会的空間に占める彼自身の位置に対する絶えざる課題設定として捉え直され続けていると判断されよう。

5. おわりに

ブルデューの研究軌跡を振り返ると，学生時代に抱いた文化的恥辱感（＝身体化された階級格差の感覚），アルジェリア独立戦争に対する政治的意図と学問的貢献，そしてアルジェリアの人々に対する親近感と彼自身の文化的恥辱感からの解放といった様々な個人的体験が，常にその学問形成を促し方向づけてきたことが分かる。個人的経験がこれほど重要な動因となったのは，彼が哲学，民族学・文化人類学，社会学といった異なる研究分野に関心を示しながら一貫して現実社会の人間を対象とした〈生きた学問〉を目指し，自らの経験に対して不断にかつ真摯に「反省」の眼差しを向けてきたためであろう。なぜなら，対象も，また対象を捉えようとする研究者としての彼自身も，同じ社会的空間を生きる人間であり，それゆえ社会を考察することは自らの足場を見つめ直す作業に他ならないからである。このような過程を経て，「全的人間学」と命名された初期社会学において結実した〈調整的な視点〉は，社会学の研究実践に対して自覚的に向けられた，最初の認識論的反省の眼差しであったといえよう。まさしく「ブルデュー独自の思考の長所は自らを（…）自分の生活を説明する」[Harker et al. 1990, 28＝93, 37] (4) ところに存しているのである[17]。

他方で自らの立脚点に反省を加える作業も，十分な学問的裏づけを欠いては単なるスローガンに終始してしまうことを忘れてはならない。現象学，科学認識論，マルクスやウェーバー等の社会学の古典，構造主義の認識様式といった様々な知的伝統を継承して初めて，科学的妥当性を持つ認識論的反省は可能となるのである。なおかつこれらの哲学的・民族学的成果の吸収に努めたブルデューの営為は〈生きた学問〉を射程としており，「全的人間学」「反省的社会学」に代表されるその後の社会学の展開を潜在的に内包していたとさえ考えられよう。だからこそブルデューは，アルジェリア社会の分析から彼自身の生きる現代フランス社会の分析へ，その批判の眼をきわめて自然に転じることができたのである。

【注】

[1] 幾つかの既存研究，例えば [Harker et al.(eds) 1990] [Robbins 1991] [Jenkins 1992] [田原 1993] [小澤 1994] 等は，ブルデュー理論を多面的・体系的に論じている。

[2] ブルデューの提唱する反省的社会学の視点とは，「社会学の社会学」等に代表される既存の知識社会学とは異なり，社会学の研究実践に対して認識論的次元から反省を加えるという作業を通じて達成されるものである。それはまた，プラティック理論に裏づけられた科学的な研究実践の試みのひとつと考えられよう。

[3] 「再生産システムに於ける婚姻戦略」『プラティック理論の素描』などに示される 60 年代後半以降の考察，すなわち社会学的研究を経た後に再度なされた民族学的・文化人類学的研究の分析，及びそのプラティック理論との具体的関連については，別の機会に譲りたい。

[4] 本稿ではそれぞれ扱う次元と範囲を限定して論じることとなるが，研究者をその理論とともに位置づけるためには，本来彼をとりまく知識人界・社会学界との関連性からも論じられなければなるまい。ブルデュー自身がその著作『ホモ・アカデミクス』で行ったように，他者とは異なる理論的選択を行うという視点から研究者の在り方を読み解く作業が，本稿の主旨を理解する際，相補的に必要となることを指摘しておく。

[5] ブルデューはこれを次のように定義している。「関係的思考様式は実体論的思考と手を切り，ひとつのシステムの中で各要素を互いに連結する諸関係，また各要素がそこからその意味と機能を取り出す諸関係によって各要素の性格を規定することである」[1980a, 11＝88, 6] (3)。

[6] 政治的なアンガージュマンに直接関わらなかったものの，ブルデューの政治的意識は高かった。例えばエコール・ノルマル 3 年次に哲学のアグレガシオン（教授資格）を取得するや否や 4 年次に進学せずに教職に就いているが，こうした選択は「ブルジョワ的な境遇を安閑として享受していてはいけないという政治的義務感から」なされたものであった [加藤 1990, 18] (2)。このような鋭敏な意識は，やがてブルデューをアルジェリア出兵へと導くことになる。

[7] エコール・ノルマル在籍中には論文を書かないという彼の決意も，大学教育の持つこうした保守性に対する反抗の表明であった。また，ダヴィ教授のあからさまな出身学校差別に対して憤慨し，他の学生と組んでゼミをボイコットしようともしているが，それは「彼らの普遍主義的な主張への専門家的な言明と外在的な権力への対立との不一致，そして権力のアカデミックな誤用の黙認」に対する憤慨であったと回顧している [Harker et al. 1990, 37･52-3＝93, 51･74] (4)。こうした彼自身の経験は，後の社会学的研究における教育の場の権力関係の分析へと展開されたと考えられよう。

[8] ブルデュー社会学における認識論・方法論についての詳細な検討は，拙稿 (1995) を参照されたい。

[9] この時期のブルデューの著作を扱った既存研究は稀少である。そこで本節は，ブルデューの著作を参照しつつ，Robbins (1991) (4) に多くを負って考察を展開する。

[10] この後 1 年間ソルボンヌ大学で教鞭を取り，ついでリール大学の助教授を経て，1964 年に社会科学高等研究員の教授・研究主任として再びパリに戻っている。

[11] この手法は社会学的研究に移行した後も，1975 年に出版された『アクト (Actes de la recherche en sciences sociales/社会科学研究報)』における写真やイラストなどの映像資料の重視，統計的資料とエスノグラフィーの併置など，学際的研究のための斬新的な手法として受け継がれ，また現代フランス社会の民族学的研究ともいうべき『ディスタンクシオン』(1979) においても用いられている。

[12] こうした相違点の自覚が，1972 年の彼自身の故郷の婚姻形態の調査に基づいた論文「再生産システムにおける婚姻戦略」を準備し，やがて構造主義を乗り越える「視点の転換」そして「プラティック理論」の確立へと到ることとなったと思われる。

[13] ハビトゥス概念についてブルデューが初めて言及しているのも，アルジェリア社会を対象とした 1964 年の『デラシヌマン』においてである [小澤 1994, 148] (4)。またブルデューは実践の論理の特性を特にその時間的構造の中にあ

ると考えた。すなわち，時間による交換の構造の隠蔽・否認があるからこそ構造は維持されるわけで，客観的モデルそのものは行為者の主観的経験の中には存在していないのである。客観的モデルと主観的経験とを「和解」させるというこのような見解からその後の実践に関する理論展開がなされたのであるが，これはレヴィ＝ストロースの贈与交換の分析に対しての批判から得られたアイディアであった[1980a＝88/90]。

[14] 例えば『遺産相続者たち』は，北アメリカのインディアンに関するマーガレット・ミードの研究から構想を得ており，民族学的研究の流れを組んだものであるといえる[1964, 10＝79, 1] (3)。

[15] このようなブルデューの初期社会学は，教育―文化―階級をめぐる理論として『再生産』において総括されている[1970＝90] (3)。

[16] 行為の生産図式である身体化された「ハビトゥス」という概念も，この問いかけの視点から導出・精緻化されたと考えられる。

[17] ブルデューは自分自身の社会移動とハビトゥスを「実際に真剣に考察対象にしている」[Harker et al. 1990, 26＝93, 34] (4) が，それは社会学を自他に対する解放のための自己分析の道具として捉えていたためでもある[1987, 37＝91, 45-6; 1980b, 42-3＝91, 54] (2)。また近年の「社会－分析」という手法は，学問形成と人間形成を媒介する〈調整的な視点〉を調査に応用したもので，はからずも被調査者の社会的位置の自覚を促す「臨床的な」効果が見出された[1987, 115-6＝91, 153] (3)。

【参考文献一覧】

Bourdieu, Pierre 1958, "Sociologie de l'Algérie" Presses Universitaires de France.

—— 1962, "The Algerians" Beacon Press ([Bourdieu 1958] の英訳).

——1963, "Travail et Travailleurs en Algérie" Mouton & Co.

——1964a, "Le Déracinement" (avec A. Sayad) Minuit.

——1964b, "Les Héritiers" (avec J-C. Passeron) Minuit.

——1965, "Un Art Moyen" (avec Boltanski, Castel & Camboredon) Minuit. (山縣　熙, 山縣直子訳『写真論』法政大学出版会　1990).

——1996, "L'amour de l'art" (avec Darbel & Schnapper) Minuit. (山下雅之訳『美術愛好』木鐸社　1994).

——1967, 'Sociology and Philosophy in France since 1945' (with J-C. Passeron)「主体なき哲学の死と再生」/『アクト』No. 3 日本エディタースクール出版 1987.

——1968, "Le Métier de Sociologue" (avec J-C. Chamboredon & J-C. Passeron) Mouton. (田原・水島訳『社会学者のメチエ』藤原書店　1994).

——1970, "La Reproduction" (avec J-C. Passeron). Minuit. (宮島　喬訳『再生産』藤原書店　1990).

——1976, 'Marriage strategies as strategies of social reproduction'/Forster & Ranum (eds) "Family and Society; Slections from the Annales" (Bourdieu 1972, 'Les stratégies matrimoniales dans le systéme de reproduction' の英訳).

——1977, "Algérie 60" Minuit. (原山　哲訳『資本主義のハビトゥス』藤原書店　1993).

—— 1979a, "La Distanction" Minuit. (石井洋二郎訳『ディスタンクシオン I・II』藤原書店 1989/1990).

—— 1979b, "The Inheritors" (with J-C. Passeron) Univ. of Chicago Press ([Bourdieu: 1964b] の英訳).

—— 1980a, "Le Sens Pratique" Minuit (今村・港道・福井・塚原訳『実践感覚 1・2』みすず書房 1988/1990).***

——1980b, "Questions de Sociologie" Minuit. (田原音和監訳『社会学の社会学』藤原書店　1991).

——1987, "Choses Dites" Minuit (石崎晴己訳『構造と実践』藤原書店　1991).

Carsten & Hugh-Jones (eds) 1995, "About the house—Lévi-Strauss and beyond——" Cambridge University Press.

Cuisenier & Segalen 1986,『フランスの民族学』樋口　淳・野村訓子訳，白水社　1991.

Harker, Mahar & Wilkes (eds.) 1990, "An Introduction to the Work of Pierre Bourdieu: the practice of theory" Macmillan Press. (滝本・柳訳『ブルデュー入門』昭和堂 1993).

Hastrup & Hervik (eds) 1994, "Social Experience and Anthropological Knowledge" Routledge.

北条英勝　1996,「P. ブルデューの象徴的支配の社会学と社会学的認識の理論」/『東洋大学大学院紀要』32.

Jenkins, Richard. 1992, "Pierre Bourdieu" Routledge.

加藤晴久（編）1990,『ピエール・ブルデュー』藤原書店.

川合隆男　1985,「C・ライト・ミルズの知的職人論と社会学的啓蒙～現代社会学の地平とその批判的考察～」/『法学研究』58 (2).

——1996,「日本の社会学史と社会調査史（有末・霜野・関根（編）『社会学入門』弘文堂).

Marx, Karl 1845,「フォイエルバッハにかんするテーゼ」(古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』岩波文庫 1978（改版)).

三浦直子　1995,「社会理論における二項対立の統合を目指して～ブルデュー理論の研究実践への方法論的展開～」/『哲学の探求』23.

宮島　喬　1994,『文化的再生産の社会学～ブルデュー理論からの展開～』藤原書店

NHK　1994,「ETV 特集，　ピエール・ブルデュー・インタビュー」.

日本エディタースクール（編）1986,「ピエール・ブルデューの全仕事: 1958-1985」/『アクト』No. 1 日本エディタースクール出版.

小澤浩明　1994,「ブルデューの教育社会学理論の成立とその位置について」/『一橋研究』18 (4).

Robbins, Derek. 1991, "The Work of Pierre Bourdieu" Open University Press.

田原音和 1993,『科学的知の社会学』藤原書店.

*** 『実践感覚』に付録として収められている「家または転倒した世界」は，1963 年に書かれ，1970 年のレヴィ＝ストロース 60 歳記念論文集 ("Echanges et communications, Melanges offerts à C. Lévi-Strauss à l'occation de son 60c anniversaire" Mouton, 1970, p. 739-58) に最初に発表された論文に，多少手直しを加えたものである[1980a, 22＝88, 16]。本稿においては，1963 年の論文として位置づけて分析している。